



銭湯のようにあたたかでやさしい 心を受け継ぎ紡ぐ“イベント酒場”

イベント酒場 経堂 さばのゆ 須田 直子さん



イベント酒場 経堂 さばのゆ | 経堂2-6-6プラムボックスV1F
TEL : 03-5799-6138 <https://www.sabanoyu.com/>

経堂を愛した店主が仕掛けた 名物づくりと店のはじまり

ユニークなのは店名だけではありません。『さばのゆ』はイベント酒場。銭湯でも、ただの居酒屋でもない特別な場所。

「経堂に住んでいた頃、銭湯に行きたくて検索すると、この店が出てきて困ったこともありました」。そう笑うのは、2代目店主の須田直子さん。

『さばのゆ』を立ち上げたのは、後に夫となる須田泰成さんでした。もともとはコメディライターですが、雑誌や広告の仕事から、テレビや新作落語の作家まで多才に活躍。何より“経堂愛の深い人”だといいます。街を盛り上げるため、名物をつくろうと考えた泰成さんが出会ったのが、宮城県石巻市にある『木の屋石巻水産』のサバ缶。2007年にはサバ缶フェアを開催。ここで出されたメニューはテレビでも取り上げられ、話題となりました。そして、2009年に『さばのゆ』をオープン。「昔の銭湯のようにあたたかな人のつながりのある場をつくりたい」との思いが込められたそうです。

被災した友の力になりたい サバ缶がつないだ連帯と支援

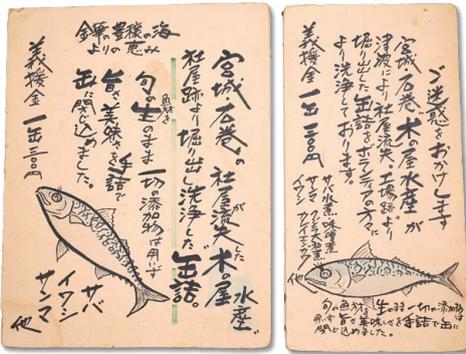
大きな転機となったのは2011年の東日本大震災。木の屋のサバ缶で『サバ缶祭』を予定していた前日のことでした。

「彼(泰成さん)と木の屋さんもう親友のような関係。力になりたいと思ったそうです」。工場は被災し、残されたのは津波による泥から掘り出されたサバ缶たち。



▲右は当時の泥を洗ったサバ缶

売り物にはできなくても、洗えば中身は食べられます。「泥がついたまま送ってもらい、商店街の有志の方々と店の前で洗って販売し、義援金にしたんです」。



▲震災後、店頭メッセージボードを設置し、道ゆく人に思いを伝えた

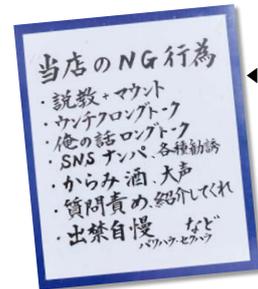
この活動は全国へと広がり、計22万缶を販売。工場再建の一助となったといいます。直子さんは当時、経堂に住んでいたものの、泰成さんと知り合う前。ニュースで活動を知り、「すごく面白い、いいことをやっている人」と思ったといいます。時は流れ、2023年1月、泰成さんがグラフィックデザイナーの直子さんに仕事を依頼してふたりは出会い、運命に導かれたように3月には結婚。ところが同年12月、泰成さんは突然、病に倒れ、帰らぬ人となりました。

二代目店主として守り育む 「いい湯加減」の居場所づくり

「彼は、地元の人に愛された店がなくなること誰よりも悲しむ人でした」

だからこそ、直子さんは店を残そうと決意したといいます。「肉体は失われても、彼の頭脳や心はここに生きている気がして。どうしたら残せるかと模索しました」。支えになったのは常連客や街の人々。「頑張りすぎると長続きしないよ、と声をかけられたり、相談にも乗ってくれています。彼は、仲間という素晴らしい財産を残してくれました」。

イベントのジャンルは幅広く、泰成さんゆかりの人気落語家の落語会をはじめ、直子さんの代からは、ウクレレを気軽に練習できる『サバレレ部』も人気に。「ひとりで初めて来店される方も多いんですが、常連さんの人柄もあってリピート率が高いんです。私自身、彼と出会うまでは孤独な部分がありました。何のつても身寄りもなく引っ越してくる人もいないじゃないですか。そんな人が仲間をつくれて、いい湯加減でリラックスできる場所でありたいと思っています」。



▲店に置かれたプレート。泰成さん考案のルールが店の居心地を守っている

『サバボックス』という本のレーベルも立ち上げ、トークライブや企画会議などの活動にも注力。「当初は彼の意志を継ぎなきゃと思い過ぎて、自分の仕事や個性をおろそかにしていたんです。イベントも彼の時代はアカデミックだったんですが、私はポップで楽しいことが好き。今は、私が得意なことも大切にしていこうと思えるようになりました」。

店のキャッチコピーとなっている『つくる とつなげる』という先代からの精神は、直子さんの代となってさらに育まれ、豊かな温もりの輪を広げています。

